

はしがき

二〇二〇年、広島は被爆七五年を迎えた。奇しくもこの年から新型コロナウイルスが本格的に世界中に蔓延した。感染症の恐怖、生活の先行き不安。職場や学校、さまざまな集いなど、なんとか心をつないできた場所へも行けなくなった。このコロナ禍のために広島市立大学広島平和研究所では多くの研究活動を中止せざるを得ず、教育活動もさまざまな制約を受けることになった。こうしたなかで、被爆七五年における研究活動として、広島平和研究所のすべての教員が執筆して『広島発の平和学』を出版することを決めた。

「広島発の平和学」というのは、広島にある大学らしいフレーズであり、私自身、広島平和研究所の役割や大学院平和学研究科の特徴を述べるときに、このフレーズをよく使う。

しかし、「広島発の平和学」というフレーズは、広島平和研究所（一九九八年四月設置）の基本構想ですでに使われている。基本構想は本研究所の具体的課題の一つとして、「平和研究の発展に寄与しつつ、『広島から発信する平和学』を構築して、新しいパラダイムを模索していく」（四―五頁）ことを挙げている。そして、これを「広島市の設置した大学が負わなくてはならない責務」（五頁）と記している。

今回の『広島発の平和学』の出版は、いわば二〇年越しの宿題への取組となる。といっても、より直接的なきっかけは、二〇一九年四月に大学院平和学研究科（修士課程、現在博士前期課程）を開設し、二〇二二年四月に博士後期課程を設置したことにある。なぜ、広島にきて平和学／平和研究（以下、平和学と記す）を学ぶ必要があるのだろうか。東京や関西、あるいは欧州や米国の大学院で学ぶ平和学とどこが異なるのだろうか。これに対する答えを書物で示したいと考えたからである。

『広島発の平和学』の編集・執筆を進めるなかで、いくつか深く考察したい課題が浮かんできた。

まず、「広島発」というときの広島とは何か。広島の自己像と諸外国における広島観はどのように相違しているのか。また、広島・長崎の被爆に関する研究をいかにすれば平和学の理論・概念に取り入れ、平和学をさらに発展させることができるのだろうか。次に、平和学は学際的であるといわれる。それでは学際的アプローチとは何か。これまでも繰り返し問われてきたことである。一つの事象をさまざまなアプローチから分析し、多面的に把握する。しかし、基本構想はそこに留まらず、「新しいパラダイムを構築していく」ことを求めている。そのためには、さらに何が必要なのだろうか。最後に、「広島発の平和学」として取り上げるべき多くのテーマを一冊の本で網羅的に考察することはもとより難しい。加えて、国際関係の理論研究の場合であるが、いかに科学性を追求しようとも、偏狭性（パロキアリズム）から逃れることはできないとの議論もある（K. J. Holsti, "Theories of International Relations: Parochia or International?" 『国際政治』第八五号、一九八七年、一七―三三頁）。これまで見落としてきた重要な問題はな
いだろうか。

本書は「広島発の平和学」について、広島平和研究所の教員全員で取り組む最初の書物であり、こうした課題にたとえ一つずつでも果敢に挑戦していくものである。

二〇二一年四月

広島平和研究所長 大芝 亮